

は凡て之を適用することとし、(c)國は小くとも費用の半分を負擔する。

(三) 食物に二重價格を設け二人以上の子のある家庭には廉い方の價格で販賣する制度は提案されたが尙考究中で未だ實現されない。

十、醫療の社會化 (二)に述べた母子健康相談所及(九)に述べた榮養品の無料配給の外、齒科醫の社會化が實現された。三歳乃至十五歳の小兒は齒の手當を受けなければならない。十五歳以上の子も財源の許す限り手當を受けることが出来る。之に對し、親は第一子は五クローネ、第二子は三クローネ、第三子は二クローネの負擔をなし、第四子以上は無料である。成年男子に對しても從來の半額を以つて手當を加へる。

結 語

以上は一九三七年及一九三八年の議會に於て既に實行せられたもの大要である。右の外に人口委員會に於て提案せられ、政府又は議會に於て考究中のものは數多い。それに就て著者の意見を述べて居るが、著者は近くスエーデンの人口の問題に就て單行の著書を出す筈であるから著者の意見は該書物に依つて伺ふ事とし度い。然し茲に一言著者の見解——從つて其は或程度迄人口委員會の意見であるが——と政府及議會の態度との差を見るならば、著者は、人口政策の根本原理は消費の平等化でなければならぬと云ふ。而してかの原則を實現するためには所得の平等化を以つては足れりとせず、生活必需品及勞務が協同主義の基礎により公共團體に依つて平等に、社會的に、民主的に消費されなければならないとする。從つて其處には貧民救済の思想は毫も入るべからず、中産階級も勞働階級も區別さ

るべきでなく、兒童哺育の援助に對しては毫も救済の惡名を受くべきではないとする。然るに議會に於ては、何等かの制限を加へ人口増殖政策に貧民救済と相似たる形態を與へたことを著者は自認して居る。

人口政策は今實施の第一歩を進めたのみでその成績は固より知るを得ない。然し著者は産兒制限の思想及手段の普及を制限する方法を採らざりしが故に、今後尙一面に於て出産の減少する傾向あるべきを認め、上記政策に依る出産の増加と何れが大なるか俄に豫斷を許さないと曰ふ。唯望ましからざる又は、望まれざる兒童の出生は減少し、兒童の質の向上する事は著者の信じて疑はざる所である。然し出生減少は今後次第にその惡影響を具現し來るべきを以つて、人口増殖政策は更に徹底せらるべき運命にある事は著者の豫斷する所である。(北岡壽逸)

醫學博士渡邊定、理學士川井三郎 共著「日本人の壽命に關する研究」

四六倍版二九五頁 非賣品

死亡率に關する研究に於て我國の權威者である渡邊博士は、その驚くべき有能なる協力者川井理學士と共に今度新著「日本人の壽命に關する研究」を出された。就て見るに取扱の周到なる、資料の豊富なる誠に從來のこの種の著書の追従を許さない。唯我々の理解に苦しむ事は斯くの如き名著を何故に非賣品としたかと云ふ事である。惟ふに渡邊博士は本書の貴重なる資料を更に碎いて一般的なる著書論文とさるゝ事と察せらるゝ。本書を非賣

品とした事に依つて博士はかゝる責務を負ふたものと云ふべきである。本書は四六倍版約三百頁、載する所の表及圖數百悉く之睿智と勞苦の結晶たらざるはなく、茲に簡単に紹介すべく餘りにその内容が充實して居る。解説

も亦著書に期待する外なきも、こゝにその結構と片鱗を示すこととする。本書は第一編總説に於て全體の解説を加へたる後、第二編に於て、日本の壽命及死亡率をあらゆる角度より研究し就中諸外國と比較して、日本

日本及主要各國年齢別死亡率 (千人對死亡率)

(イ) 男子

年齢	日本	英吉利	獨逸	佛蘭西	伊太利	米國白人	ソヴィエト 邦	米國黑人
零歳	(一九三一年) 一一三・〇三	(一九三一年) 七一・八六	(一九三一年) 八五・三五	(一九三一年) 九〇・一八	(一九三一年) 一一五・三二	(一九三一年) 六二・三二	(一九三一年) 二〇一・〇二	(一九三一年) 八七・三二
一歳	三六・九九	一五・三〇	九・二六	一六・九〇	三八・九七	九・九三	六六・七〇	一六・五七
二歳	二〇・四五	六・五七	四・五〇	六・七三	一三・二四	五・二〇	三二・九五	七・三七
三歳	一三・四九	四・四一	三・四四	四・二七	七・四二	三・五九	一八・九九	四・四〇
四歳	九・一一	三・五九	二・七四	三・三八	五・一二	三・〇九	一四・五四	三・二七
五歳	六・四八	三・四三	二・三二	二・八五	三・六五	二・六六	一〇・九一	二・九五
一歳	二・四〇	一・四六	一・三二	一・六三	一・九九	一・四七	三・二二	二・一一
二歳	四・七九	一・九七	一・五七	二・四九	二・三八	二・一三	三・一六	四・三三
三歳	九・九六	三・一六	二・八三	五・一八	四・一四	三・一八	五・四〇	八・五八
四歳	九・二二	三・三〇	二・九七	五・二三	四・二七	三・七一	六・三八	一〇・九六
五歳	七・六九	三・四〇	三・二四	五・八八	四・六六	四・一三	六・三九	一二・七五
六歳	七・六〇	四・二一	三・九四	七・〇七	五・三〇	五・一〇	七・五三	一四・八四
七歳	八・九一	五・六二	四・八二	八・九〇	六・三六	六・七九	九・三四	一八・一三
八歳	一一・八五	七・九九	六・五八	一一・六四	七・九四	九・二九	一二・五四	二二・四〇
九歳	一七・二五	一一・二八	九・三九	一五・三三	一〇・六三	一二・七八	一六・五七	二七・五〇
一〇歳	二三・九八	一六・一四	一四・一八	二〇・七一	一四・六八	一八・一九	二二・六三	三三・九二
一〇歳	三五・五四	二四・一五	二一・七二	二九・一八	二一・九二	二六・四四	二七・八七	四一・四〇
一〇歳	五一・九一	三七・九一	三四・〇四	四二・三三	三三・一九	三八・六五	四〇・三九	五〇・七二
一〇歳	七六・六八	六〇・三五	五四・〇一	六四・二八	五三・二三	五七・九六	五九・六八	七〇・一八

(B) 女子

年齢	日本	英吉利	獨逸	佛蘭西	伊太利	米國白人	米國黑人	米國黑人
零歳	九九・二七	五四・五五	六八・三九	七一・六二	一〇二・二五	四九・六三	一七二・一四	七二・〇四
一歳	三五・二七	一三・四五	八・二三	一五・一三	三九・〇五	八・七九	六〇・九七	一四・三七
二歳	一九・九六	六・〇三	三・九八	六・三一	一三・一八	四・五七	三〇・八九	六・六四
三歳	一三・六一	四・〇七	二・八八	四・〇一	七・一九	三・二六	一八・三六	四・一三
四歳	九・三二	三・三六	二・四七	三・一七	四・八九	二・六八	一四・〇四	三・二五
五歳	六・五七	二・九八	二・一五	二・七九	三・六六	二・二〇	一〇・四九	二・八四
一歳	二・五四	一・三四	一・一四	一・六〇	一・七九	一・一三	二・九二	一・六一
二歳	六・九五	一・九一	一・三〇	三・〇四	二・六四	一・六四	三・二〇	五・一二
三歳	九・〇六	二・六八	二・二七	四・八二	三・八八	二・七七	四・七四	八・八二
四歳	九・〇六	二・九八	二・七〇	五・〇〇	四・四六	三・三九	五・七〇	一〇・三四
五歳	八・〇六	三・一九	三・〇一	四・七八	四・三九	三・七四	六・〇〇	一一・五九
六歳	八・二四	三・六四	三・四八	五・一四	四・八一	四・三三	六・六九	一三・二二
七歳	九・〇一	四・四〇	四・二二	六・〇八	五・四三	五・三二	七・二六	一六・二五
八歳	九・四九	五・八四	五・四六	七・五〇	六・二〇	七・〇二	八・三二	二〇・一八
九歳	一一・一一	八・一六	七・九一	九・七七	八・二〇	九・五九	九・四二	二六・六五
一〇歳	一五・九〇	一一・七四	一一・五三	一三・三八	一一・三六	一三・七五	一三・三一	三四・九九
一〇歳	二二・七四	一七・七〇	一七・四六	一九・二六	一七・四七	二〇・六三	一八・三四	四二・二〇
一〇歳	三二・〇八	二七・五五	二八・五三	二九・八六	二八・四〇	三一・二五	二九・三七	四九・三五
一〇歳	三四・〇八	二七・五五	二八・五三	二九・八六	二八・四〇	三一・二五	二九・三七	四九・三五
一〇歳	五三・三三	四四・五一	四七・六一	四八・一三	四六・五三	四八・六六	四五・七六	六一・七四

人口構成が日本と同一の場合の各國人の死亡數

男子

年齢	日本人男子	日本人男子	英國	獨逸	米國白人	米國黑人	伊太利
昭和十一年始	四、六八七、六二九	昭和十一年中	(一九二一)	(一九二一)	(一九二一)	(一九二一)	(一九二一)
死亡數	二〇一、四四九	死亡數	一〇一、一九四	一〇五、八二〇	八三、九〇三	一一八、五八一	一七七、八四四

醫學博士渡邊定、理學士川井三郎共著「日本人の壽命に關する研究」

五——一四	八、〇五二、四一一	二六、九二四	一四、六六七	一二、七三五	一四、二九七	一九、八七四	一七、八四五
一五——二九	八、九八九、二五八	七三、五二二	二七、三三二	二四、三七六	二九、五六一	八〇、四四七	三四、九三七
三〇——四四	六、一六〇、〇五五	四九、八六八	二九、三三三	二六、三二九	三五、五七九	一〇〇、四五七	三四、七二四
四五——五九	四、二一五、二三一	八四、一一五	五六、一九九	四七、七八六	六三、二五一	一二五、二六〇	五二、〇七三
小計	三三、一〇四、五八五	四三三、八六八	二二八、七三五	二一七、〇四六	二二六、五九一	四四四、六一九	三一七、四二三
六〇以上	二、二六五、二二四	一六七、六五六	一三四、五五二	一二二、六五七	一二六、六九八	一五一、二二二	一二二、八七七
合計	三四、三六九、八〇九	六〇三、五二四	三六三、二八七	三三九、七〇三	三三三、二八九	五九五、八四一	四四〇、三〇〇

女子

〇——一四	四、五九一、八〇〇	一七八、二四四	七八、〇五五	八四、一七八	六六、九九八	九七、六二一	一六〇、五〇九
一五——二九	七、九〇九、八六一	二九、八〇〇	一三、一五八	一〇、八三三	一〇、八三〇	一七、一〇五	一六、七四〇
三〇——四四	八、八〇一、一七九	七五、九五九	二四、〇九二	二〇、五一五	二五、二四三	七九、五一五	三四、八一九
四五——五九	五、七六九、八九〇	四八、五〇九	二二、八〇三	二一、九六三	二七、三〇五	八四、七二二	二八、八五二
小計	四、二三六、〇八八	六八、三九一	四一、三七六	三九、七三六	四八、五五一	一二五、六一八	四〇、九九九
六〇以上	三、三〇八、八一八	四〇〇、九〇三	一七九、四八四	一七七、二二五	一七八、九二七	四〇四、五七一	二八一、九一九
合計	二、八三〇、七九四	一六七、三六五	一四六、三〇三	一五四、〇一九	一五〇、一〇六	一七七、七七二	一五三、九二九
合計	三四、一三九、六二二	五六八、二六八	三二五、七八七	三三一、二四四	三二九、〇三三	五八二、三四三	四三五、八四八

男女合計

〇——一四	九、二七九、二四二	三七九、六九三	一七九、二四九	一八九、九九八	一五〇、九〇一	二二六、二〇二	三三八、三五三
一五——二九	一五、九六二、二七三	五六、八〇四	二七、八二五	二三、五六八	二五、一二七	三六、九五二	三四、五九五
三〇——四四	一七、七九〇、四三七	一四九、四七一	五一、四一四	四四、八九一	五四、八〇四	一五九、九六三	六九、七五六
四五——五九	一一、八二九、九四五	九八、三七七	五二、一五六	四八、二九二	六二、八八四	一八四、六二九	六三、五七六
小計	八、四五二、三一九	一五二、五〇六	九七、五七五	八七、〇二二	一一一、八〇二	二五〇、八七八	九三、〇七二
六〇以上	六三、三一三、二一六	八三六、八五一	四〇八、二一九	三九三、七七二	四〇五、五一八	八四八、六二四	五九九、三五二
合計	五、〇九六、〇一八	三三五、〇二一	二八〇、八五五	二七六、六七六	二七六、八〇四	三二八、九九四	二七六、八〇六
合計	六八、四〇九、二三四	一一、一七一、八七二	六八九、〇七四	六七〇、四四七	六八二、三三二	一一、一七七、六一八	八七六、一五八

人が死亡率に於て外國人に比し甚だ不良なる事を示して居る。而して死亡

率の比較は凡て年齢別により時として累年的に比較して居る。試みにその

考察、第二に職業、第三に社會階級の死亡率に及ばず影響を觀察する。第一は純醫學的で、第二、第三の職業的社會階級別死亡率の研究は我國に全然資料を缺くを以つて資料は悉く英國の夫で、英國の職業別死亡率研究の紹介である。

以上は只結構と片鱗の紹介で、詳細の紹介は亦別に他の人に願ふの外ない。唯一言私の著者に對する希望を云ふならば、之を詳細に死亡率の研究を遂げた著者は、我國の死亡統計の一大缺陷たる職業別死因統計を改善する爲に一時の勞をとるべきではあるまいか。私は何時でも喜んで博士の學位に附して大馬の勞に服する事を辭するものではない。(北岡壽逸)

カイザー著「獨逸人口史」

Erich Keyser, Bevölkerungsgeschichte Deutschlands, 1938

人口論史に關する論策は尠くないが、人口史となるとまとまつたものは殆んどないといつてよい。本冊子は特に獨逸古代民族史に造詣の深い著者が今後の更に具體的な研究考證への手引きとする爲に今日までの諸家の研究成果に一應の概觀的集成を試みたもので、獨逸人口史として現在我々の利用し得る最新の好著であるといへよう。著者の最後の目的は國民社會主義の主旨に隨つて獨逸民族の本質を究明すること、獨逸人口史は言はゞ其の豫備的研究として缺く可からざる前提をなすものであるといふ。蓋し「民族」とは「人種」と同義ではなく、また「國民」なる概念とも必ずしも相蔽ふものではない。また民族を文化共同體或は言語共同體など、定義することも理由がないではないが、併し一民族の創造する固有の文化は同時に他民族へも移植されるものであるし、また獨逸語を話す獨逸系ニダヤ人は決して獨逸人

ではない。著者によれば民族とは幾世代にも互る血族的な連繫と共同の生活とを通じて形成され、自ら他民族と區別するやうになつた史的結果としての生活共同體を謂ふわけで、かゝる史的結果としての民族の本質を明らかにする爲にこそ獨逸民族成立の史的葛藤は先づ之を特に獨逸人口史として展開せねばならぬといふ。従つて著者のいふ獨逸人口史とは筆を獨逸民族の先史時代に遡る人種的淵源から説き起し、其後の民族移動、他民族との闘争、或は身分階級の分化と其の變遷等諸般の史的場面に互つて論述されてをり、この多難な史的錯綜を一貫して獨逸民族が古代以來自らの血と土地とを喪ふことなく持續して來た逞しい民族の生活力を闡明することを主眼としてをり、従つてまた近代特に十九世紀文明が生んだ血の意識の喪失、出生力の減退、或は都市集中の弊害等寒心すべき諸事象を警告し乍ら之に對するナチス人口政策の將來に期待して筆を結んでゐる。統計的數字も信憑し得るもの殆んど凡てを各地方各都市等について列擧するといふ細微を盡したのだが、概括的な結論を示してゐないのは著者の學者的良心によるものといへようか。たゞ獨逸人口史の大勢を窺ふとする我々他國の讀者にとつては多少煩に堪へ難いものがないでもない。所謂人口政策的史實について闡説するところの殆んどないのも物足りない點の一つだが、著者の目的はかゝる人篇を超えたるものを闡明するところにあるのかも知れない。

著作の性質上内容の全般的紹介は不可能だが、以下筆者興味本位の讀後の心覺えを摘記して好著紹介の辭に替へることとする。

一、獨逸の土地はインドゲルマン民族の故郷である

著者によると獨逸人口史は地上に於ける最初の人類の出現と共に初まる。といふのは遠く氷河時代以前或はその中間の溫暖期に生存してゐたと推定される前人類の遺跡が獨逸の土地に見出されたからで、所謂 *Præ-homo Heiderbergensis* として知られる右の事實は人類發生の一元説を現學界の定説なりとする著者にとつては同時に人類史上獨逸の土地の特別